

編入学をして感じたこと

松居 佑奈（福祉学科4年）

タイトルの通り、私は編入学をしてコミュニティ福祉学科（以下：コミ福）で勉強しています。以前は都内にある短期大学で2年間勉強していました。高校卒業の時点から編入学を決意していたので、それなりの覚悟はしていましたが、やはりその壁は高かったです。どこの大学も募集人数は極端に少なく、試験内容も専門的な内容が多いため、運次第といわれる試験もありました。そんな中、コミ福に編入学をすることが決まり、正直、救ってもらったという安堵感と試験勉強からの解放感を同時に味わった記憶があります。新しい環境での挑戦は楽しみでもあり、不安でもありました。

どうしてコミ福に編入学したのか

編入学前に在学していた短期大学ではキャンパスが都心にあったこともあり、どちらかという若者が対象となるような学問を専門分野として勉強していました。専門とはいっても、短期大学での授業は導入的な内容のものが多かったので、学識はまだまだ乏しいです。短期大学での勉強の領域は、コミ福での学問領域とはかけ離れている内容だと思います。そんな私がどうして編入学を決めたのか。そこには、東日本大震災での経験が少なからず影響しているのではないかと思います。私が生徒会長として中学校をまとめる役職に任命されてから半年が経過した時に、その出来事は起こりました。震災による被害が大きかった地域は母の故郷でもあるため、私にとってもゆかりの地でした。毎年夏休みに遊びに行っている地域が悲惨な事態になっていると聞きし力になりたいと思い、中学校の先生方に協力していただき校内での募金活動を行なったことがあります。その後、震災の復興には人々の心のケアも重要であるというニュースをテレビ番組等で見かけたこともあり、現地へ赴きたいという思いが強くなります。そのため、短期大学在学時にはBlue Birdという東日本大震災被災地支援ボランティアに所属して活動をしました。イベントの手伝いやホームステイ等で市民の方々と交流をすることで、募金活動では見えなかった現地の実態を体感することができました。普段テレビ越しで見ていた風景が目の前に広がった時、震災前後で生活が変化していないことが特別なんだと気づかされました。これらの経験が、編入先を決める

ことに影響したのではないかと考えています。

福祉学科での学び

まずは、コミ福で勉強している学生の知識量に追いつくために、高齢者や子どもなど対象者の範囲を限定せずに幅広く履修していきました。2年間の知識の差を埋めることは容易ではない上に、専門的な内容の授業も多いことから、当初は授業の内容についていくことが精いっぱいでした。理解を深めるために図書館で勉強したことも今では良い思い出です。様々な授業を履修して思ったことは、当事者主体の支援ができる環境を整えることの重要性です。今となっては一般化してきており、より高度で発展した支援が求められています。福祉に関する歴史を学ぶと、社会的弱者だと世間から言われた方々が、人権を保障されないような想像を絶する扱いを受けていたという過去もあり、その体制を整えることがいかに難しいのか理解しました。高齢者の支援を例にとると、地域包括ケアシステムは当事者主体の支援が実現しやすい体制であると思うのですが、支援する側の1組織である市町村では、介護保険制度の改定を機に担当する範囲が広がり高度化・複雑化が進んでいます。支援する側の負担を見て見ぬ振りをする当事者主体の支援の体制は望ましくはないと思っています。

また、その人らしい生活を営めるようにするためには、その人の年代と置かれている状況によって支援の仕方が変わってくるのではないのでしょうか。福祉の対象としての「子ども」と「女性」、「高齢者」と「障がい者」にはそれぞれ支援の仕方に共通点があると考えています。私が出た知識で考えることなので、そうではないと思われる方もいるかもしれませんが、一学生の見解として見て頂ければと思います。子どもと女性は高齢者や障がい者と比べて身体的な不自由が少ないです。児童虐待やいじめ、DVや買春・売春等の外部からの刺激がある際に支援が必要になることが多いと感じています。権力者とのつながりが強いことから、外部へと訴えられない関係性が構築される環境に置かれやすいという共通点があると感じています。また、高齢者と障がい者には、社会や地域に多様性が受け入れられにくいという共通点があると感じています。定年退職後の高齢者の中には、退職前と変わらない技量で勤労ができる方がいらっしゃいます。障がい者の中にもリハビリテーションを継続してそれまでの生活に近づけようと努力している方もいらっしゃいます。これらのことから、子どもと女性への支援では権力者からの保護を、高齢者と障がい者への支援では多様性を受け入れることが重要になってくるのではないかと考えています。

正課インターンシップ Walt Disney World® Resort

社会人として働くために、必要となる考え方を学ぶことを目的に正課インターンシップへの参加を決めました。将来的には英語を使った仕事をしてみたいという夢があったので、英語を使えるインターンシップ先を希望しました。これまでの経験と今後のビジョンとを照らし合わせた結果、自分のためになるインターンシップはWDWであると思ったことが参加理由です。参加にあたって、自分の英語力の向上と、ホスピタリティの最高峰といわれているWDWでの人材教育はどのように行われているのか理解することを目標に設定していました。現地では、Youth ProgramというWDWが展開しているカリキュラムを基に、チームワークを形成するときのようなことに気を付けているのかや、リーダーがチームをまとめる時の4つの戦略等についてレクチャー形式で学びました。Youth Programを通して、WDWの考え方にはゲストに必ず満足してもらえる対応をするという土台作りがなされており、キャスト間での認識の相違を最小限に抑えることや意見の交換を重要視していることを理解しました。

ゼミでの学び

短期大学での学びも活かしたいと思っていたため、ゼミでは権安理先生のゼミに所属し、3年生の1年間は公共空間のリノベーションについて勉強していました。権先生のゼミはフィールド調査をして自分で実態を把握するという点が魅力的です。夏期休暇では、富山県水見市へ行き、廃校を市役所にリノベーションした事例を調査してきました。フィールド調査は短期大学で卒論を書いた時にも経験していたので、どのようなものであるのかは理解していました。研究対象が変わると調査先への質問内容も異なってくるので、事前準備に加え、この調査にはどの質問が適切なのかと考えることが楽しかったです。権先生の下で卒業論文を書き上げることも決めており、今はその準備に取り掛かっています。先生はとても細かいところまで指導するので、1度は私たちが先生のことを嫌いになるかもしれないし、先生も私たちの事を嫌いなるかもしれないと仰っていました。先生の指導の下、私らしい卒業論文を完成できるように日々奮闘していきたいです。

このまなびあいの存在は編入学生のガイダンスで知ったのですが、先生のみならず在學生、卒業生までもが手を挙げれば執筆できるスタイルにはコミ福らしさを感じました。残り僅かな学生生活ですが、自分の将来・社会の将来のためになることを勉強していきたいと考えています。このエッセイを、私のように学生生活の半分が過ぎて、新しい環境に身を置く決意をした3年次編入の後輩たちが読んでくれたら嬉しいです。